

井上光晴

死者の時

中央公論社

著者略歴

1926年、旅順に生れる。少年時代、兵庫県尼ヶ崎共和製鋼所分析見習工、長崎県崎戸炭鉱炭札係、抗内道具方として働く。戦後 1945 年日本共産党に入党したが、1953年離党。現在、新日本文学会会員、現代批評同人。

著書 「ガダルカナル戦詩集」
「虚構のクレーン」
「トロッコと海鳥」
「書かれざる一章」
詩集「すばらしき人間群」

死 者 の 時

㊦

著 者 井上光晴

昭和35年 9 月30日初版発行
昭和35年11月25日再版発行

発行者 栗本和夫

印 刷 三晃印刷

発行者 中央公論社

東京都中央区京橋2ノ1
電話(561)5921~30
振替・東京34

定価280円

検印廃止

死者の時

そう苦しくはなかった、という低い波のようにうねる声がふたたび彼女の胸をとらえた。いや全然苦しくなかった、一度波の下にぐっぐつとひっぱりこまれたが、また浮かび上り、その時腰の帯剣を取りはずして捨てた、という声がふたたび波のようにきこえてきた。明子元氣か、子供は元氣か、お前たちが病氣になると死ぬにも死にきれんからなあ、といういつもの良人の声が急に途絶え、それからしばらく経ってその波のような声がきこえてきたのである。銃は輸送船の中においてきたが、帯剣のまま眠っていたので、それまで取りはずす暇がなかった、暇がないというより魚雷攻撃をうけてから船が沈むまで、あつという間のできごとだったので……できごとだったのでどうしたのどうしたの、と彼女は体を固くした。途切れた声はすぐ、それから腰が重くなった、と低い波のようにつづいた。帯剣を捨てたけれど、きつとどこかやられていたのかもしれないね、だんだん腰と肩のつけ根のところが波にひきずられるように重くなったよ。波がふつと良人の声になり、また暗い海の中に流れた。班長だとか天皇陛下万歳だとかいう声があちらこちらにきこえた。船があつという間に沈んだから、兵隊は皆どこかやられていたんだ。しかし苦しくなかったよ、明子、それからまただんだん波が重くなっておれはお前のことを考えはじめた。お前を抱きながら死ぬのだなと思った。明子、ちっとも苦しくなかったよ、苦しくなかった。果しのない海の彼方から地を匍う風のように途切れ途切れにきこえてくる良人の

声はそこで消えた。ソロモンの海の向うからきこえてくる良人、原洋一の声はそこで終り、「苦しまずにね」とじつとりと額にうかぶ汗を掌で拭いながら明子は思った。黒い幕だけがぼんやり判別できる電灯のつかぬ部屋の中に、ちょうど良人が死んだソロモンの海のようなゆたゆたしたものが流れ、その流れに熱っぽい身をまかせながら、彼女はついさっききいた死ぬ瞬間の良人の声と顔をはっきり体の中にとらえようとした。「お前を抱きながら死ぬのだと思った」という声の調子が少し簡単すぎるようで不満だったが、「苦しまずに死んだのならよかったね」とふたたび心の中で呟いた。佐世保駅の広場で挨拶する良人の顔がまたゆたゆたと彼女の閉じた瞼の中にあられ、彼女はそれを圧しつぶした。彼女はそのゆがんだように緊張した良人の顔を考えるのが苦痛であったのである。彼はまだ召集令状のこない前、「おれにもくるかなあ、くるかもしれんね、そんなときは大丈夫かなあ、おれは大丈夫だが、お前は大丈夫かなあ」といいながら彼女の頭を自分の腕の中に入れるその時の良人の顔を思いだしたかったのである。しかしなぜか見送りの町内会の人々に挨拶するその時の良人の表情しかはつきりつかむことができない。なぜかそのゆがみ緊張した赤ダスキの顔だけが鮮かに浮かび、「皆さん、ありがとうございますました。ありがとうございますました。では元気で征ってまいります」というききたくない声がよみがえってくる。彼女はその佐世保駅での顔と声をふり払うようにして立上り、襖をあけ二階の階段につづいている廊下を逆の方に歩いて玄関わきの六畳間にでた。

「どうでした」といつもズボンふうに作った新しいモンペをはいている南沢伸子がきいた。

「ええ、死ぬ時のことが」と原明子がその方にちょっと微笑を返しながらいった。壁際に坐っている、明子のみしらぬ女が何かぎくくとしたような眼をして彼女をみ、それから黙って頭を下げた。

「古田レイ子さんといわれるんよ、初めて、今日私がおつれしてね……」と伸子がその若い女を明子に紹介し、それからつづけて、「戦死された時の様子がわかったんですか、よかったですね」といった。

「ええ」と明子がいった。

「私はもう十回以上、毎週かかさずここにきてるけど、まだ戦死のところはなかなかでくれませんかね。あなたは運がいいんですね」と南沢伸子が膿んだような声でいった。

「輸送船があつというまに沈んで、それで……」と原明子がいった。「ちっとも苦しくなかったといつてました」とつづけようとしたが黙っていた。

「去年ですか」と南沢伸子がきいた。

「いえ一昨年です。昭和十八年の暮です。ソロモンでした」と原明子が少し顫える声でこたえた。

「ソロモンだとニューギニアに近いですね」と古田レイ子が言葉の先を何か重い槌で圧しつぶしたような声でいった。

「古田さんはね、婚約者の方が出征されて、もう一年も音信不通ですって」と伸子が横から説明し「ニューギニアにいつてるんですけど」と古田レイ子がまた自分の声をおしだすようにいった。

「そうですか、でも音信不通ならまだ……」と原明子がいった。

「そうですよ、そういう例はいくらでもあるんだから、一年位手紙がこなくても心配いらないうて、そうさっきもいったんですけどね」ついさっきの「もう一年も音信不通ですって」という調子を全部裏返したようなはずみをつけて南沢伸子がいったが、古田レイ子はそれにこたえず、原明子のふせた眼を自分の視線ですくい起すように「でもね、それまではずっと手紙がきたんです。そういう約束でした。ニ

ユージニヤでも何でも生きているなら、必ず何か便りがあると思うんですけど……」といった。

その時廊下で足音がして、この家の主人である戸部宗輔が瘦せた長身をあらわし、まるで待合室をのぞく医者のようなしぐさで「南沢さん、どうぞ」とうながした。

「あ、先生、今晚は。……この方です、この前お話しした方ですが、私はあとでよろしいですから」と南沢伸子が横に坐っている古田レイ子の方をちょっとふりむいた。

「戸部です、手紙か写真か持ってこられましたか」合背広を折襟に仕立てた服を着た戸部宗輔がいつも初めての人間にはそうするように眩しそうな眼つきで古田レイ子の方をみた。

「ええ写真だけ。南沢さんからききましたから」と古田レイ子がいって風呂敷包みの中から写真をとりました。

「手紙もあるといいんですけどね」といいながら戸部宗輔がその写真を受取り、「ほう学生さんですか、どこの学校ですか」といった。

「いえ、学校は長崎高商ですが、もう卒業して福岡の倉庫会社につとめていました。体が弱くて検査は第二乙種だったんですが、とられて……」と古田レイ子がこたえた。

「何歳ですか」戸部宗輔が防空被いのついた電灯の下にその写真の顔を確かめるようにもっていきながらいった。

「もし生きていたら、いま二十七歳です。こんどの戦争がはじまった翌年すぐ応召したんです」と古田レイ子がいった。

「南沢さんから大体事情はきいています、戦死されていなかったら何も霊はでませんよ」

「ええ、それでいいんです、戦死かどうかはつきりわかればそれでいいんです」

「いや、戦死されている場合でも、でないことがありますから、でないからといってはつきり生きておられるとはいえませんが」と戸部宗輔が古田レイ子の視線をおしもどすようにしていった。

「いいんです、お願いします」と古田レイ子のはじめて顔をふせた。

「じゃきて下さい、向うの書斎でもう少しお話をうかがいましょう」戸部宗輔が先に廊下の方に出ようとし、それからふり返って「原さん、お子さんはもうすっかりいいですか」と声をかけた。

「はあ、おかげさまで、昨日から学校に」と原明子がこたえた。

「お嬢さんが御病氣かなにか」戸部宗輔と古田レイ子が霊媒部屋の向いにある書斎に去ったあと、南沢伸子がきいた。

「ええ、扁桃腺になったんですが、ここの先生に頼んで海仁会の病院ですっかり治療してもらって……おかげでたすかりました」と原明子がいった。

「本当にここの先生にたのめばいいですね、病院の事務ではもうずっと古いのですからね、お医者さんなんか手をつくすだけつくしてくれますよね」南沢伸子が少し見当はずれの、そして意外に重きこえる相槌をうった。

「ええ親切にしてください」と曖昧にこたえながら原明子は「どこかやられていたのかもしれないね、といったがどこを負傷していたのだろうか、もし負傷さえしなかったら助かっていたかもしれない」とさっきのつづきを考えはじめた。

「何歳ですか」本箱を背にした戸部宗輔が、古田レイ子が椅子に腰かけると同時にきいた。そして古田

レイ子がさっきもこたえたはずだがと、とまどうように眼を上げるのにかぶせて「いえ、あなたの年です、おいくつですか」といった。

「二十三です」と被いをかけた机の上の電気スタンドの鈍い光線の輪をみつめながら古田レイ子がこたえた。

「婚約者だとかききましたが」戸部宗輔が電気スタンドの被いを手で少し広くなおしながらいった。

「はあ」と古田レイ子がこたえた。

「婚約はいつ、応召される前ですか」と戸部宗輔がいった。

「ええ、応召する前でした、福岡で……」と古田レイ子がいった。瞬間何か自分自身をうちのめすような衝動が起り、それに逆うように「戦争がはじまるとすぐでした」とつぶけた。

彼女はその夜のことを考えはじめると、いつも体のある部分に何かとり返しのつかぬ傷でもうけたように願えるのである。その日、口実を作って土曜の午後到着する列車で長崎から会いにいった彼女を博多駅に出迎えながら水谷彰はいきなり「おれたち結婚できるといいね」とそれまで思っていたような調子でいったのだ。「えっ」と古田レイ子がきき返したとき、「姪ノ浜行」の電車が折返し線路に入ってきたので、その言葉はそれきりになり、「よくこられたな」「この頃何よんでいる」「今夜の夜行でかえるんだね、そうするといま二時半だから、三時半、四時半、五時半、六時半、七時半、八時半、九時半、十時半、十一時半、十二時半、汽車は一時だからちゅうど七時間一緒におれるな」というようなことをやつぎ早にいった。それから二人だけの時間をむさぼるように喫茶店、映画、鮭料理を専門に闇で酒をのませる中洲の料理屋、やはり二時間位しか店を出さぬ焼鳥の屋台というふうに歩きまわり、だん

だんに残り少なくなっていく時間を逆にもてあつかかねて、夜の九時すぎふたたびほんもののコーヒ―をのませる因幡町の喫茶店に腰をおろしたとき、昼間博多駅頭でいった言葉をそのままつづけるように、「戦争はどうなるかな、戦争がひどくなるととても結婚できないかもしれないね」といったのである。「なぜ、兵隊にいくから」と古田レイ子はきいた。「うん、とられるだろうなあ、どんどんとられているからねえ」と水谷彰はこたえた。「大変ねえ」と彼女はいった。「お父さんたちは元氣」と彼がいった。「ええ元氣よ、母さんはずーっと風邪ひいていたけど」と彼女はいった。「大変だなあ」と彼がいった。何か言葉だけが空廻りしているようにそれが彼女にきこえた。

「前からお知り合いだったんですか」戸部宗輔が古田レイ子のやや前につきでた特徴のある唇のあたりをみながらいった。

「えっ」と少し慌てたように古田レイ子が視線をもどし「ええ、学生るとき、うちに下宿していて、それで」と口ごもった。

「それで、手紙がこなくなったのはいつからですか」前の言葉と余り連関のないかけ離れた質問をしながら戸部宗輔は「この女は男をしらないまま年をとってしまったような顔をしているな」と感じていた。「もう一年以上、最後にきた手紙が去年の正月すぎてすぐですから、もう一年と五ヵ月位になります」と古田レイ子がいった。

「本当に男をしらないのかもしれないな」という思いと、なにか急にそのことをきいてみたい気持ちが浮かんでくるのに抗しながら、戸部宗輔は、「じゃ一度やってみますか、でられるかどうかわかりませんが、ともかく一度やってみますか、生きておられるなら絶対でませんから」といって立上った。

「お願いします」と古田レイ子がいった。

「そうそう、あなたのお仕事をきくのを忘れていた」と本箱の硝子に冷い額の高い顔をおしつけるようにして戸部宗輔がきいた。

「県庁につとめていましたが、今年の三月からこちらの工廠の方にでています。いま部屋を借りているところが南沢さんの近くなので……」と古田レイ子がこたえた。

「うまくでるといいですがね、僕の霊媒は少し方法がちがうんで、出来不出来が激しくってね」戸部宗輔が何かひどく空虚な気持ちになりながら弁解するようにいった。なぜかこの女は本当は何も信じてはいないんだという思いがさっきから鋭く幾度も彼の心をつきさし、どうしようもない哀れな気分に見えつづけていたのである。そしてその哀れな気分はもしかしたら女がそうであるからではなく自分の方がそうなのかもしれぬという思いと重なり、戸部宗輔はまた「霊はむしろあなたの心に宿るんですよ、それが本当なんです。私はただ手助けするだけです」と、ややかん高くなった声でいった。

「ええ」と古田レイ子がこたえた。その時、音もなく扉があいて薄暗い部屋の光りの中でもはっきりわかるようなひどく顔色のわるい青年が入ってきて、古田レイ子を見ると、「あ」という表情をした。

「何だ」と戸部宗輔がふりむいた。

「本をとろうと思って」と青年がいった。

「息子です」と戸部宗輔が古田レイ子にいった。青年は黙って彼女に頭を下げた。自分の目的とした本ではなく、一番手近な本を持って早くその部屋をでたいという明らかにそれとわかるしぐさで青年が去った後、戸部宗輔がまた古田レイ子に弁解するように「佐賀の高等学校にいつてゐるんですが、体をこわ

しましてね、この春からずつとうちにいます」といった。

「大変ですね」と古田レイ子がいった。

戸部宗輔の胸をふたたびむなし穴のあいた風のようなものが叩きはじめ、彼は自信のない声で「それではむこうの部屋にいきましょうか、その婚約者の方を黙って考えておかれるといいのです、もしうまくいけば霊がみえてきますから」といった。

襖をあけた戸部宗輔の手をくぐるようにして、古田レイ子が先にその電灯のついていない暗い畳の部屋に坐り、その後から戸部宗輔が入って垂れ下っている黒い幕の向う側に消えた。

「いいですか、心を集中して下さい。もし私が声を出しても何もいわないで黙っていて下さい、あなたが声を出したら一度に何もかも消えてしまいますからね」と黒い幕のかげからきこえてくる戸部宗輔の声が少し変っていた。

「いいですか、黙って考えておればそれでいいんです。福岡で婚約したといっていましたね、そうですね……」戸部宗輔の声がだんだん黒い幕を伝わってどこかに落ちるように低くなり、彼女はその低い落ちていく声にゆさぶられながら（自分の方からゆさぶられようとしながら）けんめいに水谷彰のことを考えはじめた。

本物のコーヒーをのませる因幡町の喫茶店で一秒一秒迫っていくような時間が流れ、「九時半か、まだ三時間あるな」と苛だつように水谷彰がいった。「この次の日曜はだめだから、次の次に水谷さん長崎にこれない？ 来月の第一日曜ならまた私が博多にこれると思うけど」と古田レイ子が空のコーヒー茶碗を意味もなく動かしながらいった。「珍しいね、こういうののませるんだね」とお世辞をいう客

の声がかきこえ、「いやね、手持ちがあつたもんだから」と陰気な顔をした店の親父の不愛想な返事があった。

「四、五日前も会社で、おれよりずっと年上の人に召集がきたんだ、そう三十すぎている人で丙種だったとかいっていた……」と彼が古田レイ子の問いをはずすようにいった。

「そう」と彼女がこたえた。「ガッさんが昨日ワイゼンと歩いていたら」というマントをきた学生の高い声がかきこえ、その前に坐っている学生が不自然に笑った。

「そう」と彼女がまた彼の次の言葉をうながすようにいい、「三十すぎて丙種がとられるんだからね、来月の第一日曜なんていっておれないよ」と水谷彰が急に語尾を落した。

「ワイゼンは別にちゃんと九大の奴がいるんだからね、医学部らしいんだ、ガッさんが可哀そうだよ」「いやガッさんとしちゃ、ひくにもひけんというところだ」「はっはっはっ」マントをきた学生たちの声がそのマントをひけらかすように不遠慮にひびき、彼が意を決したような硬ばった表情をして古田レイ子を見た。

「明日の朝の汽車でかえらないか、学校やっぱり休むとまずいかな」

「学校より、父さんたちが……」と彼女がいった。

「そうかな、やっぱり駄目かな」と彼が眼をふせた。

「どうもでませんねえ、まるっきり反応がないですねえ」と戸部宗輔の低い声がかきこえてきた。「もうしばらく続けてみますから。そのまま動かずにいて下さい」

「駄目ということはないけど」と曖昧に返事をしながらその時、彼女は一年前水谷彰がまだ長崎高商の

学生の頃、諏訪神社の横から県立女学校の方につづく道の途中で、彼が最初にぎこちなく彼女の唇に自分の歯をがちがちとこすりつけたのをちらと思いだしたが、その最初の接吻のことを考えたということさらに戸部宗輔の声の中から二重にコーヒー店の情景と重ねて思い浮かべた。当時、水谷彰は他の同級生の一人と共に彼女の家に止宿していたが、特に起伏する感情はなくそれまで彼女は兄に対するように無邪気にふるまっていたのである。その夜は図書館についていったかえりであった。コーヒーをのませる店で「やっぱり駄目かな」と眼をふせた彼と、ぎこちない接吻のあと家に近い道下の石段にもものいわず並んで坐った時のことが、いま生ま生ましく同時によみがえってくる。

「もうすぐだなあ」としばらくしてから長崎高商学生の水谷彰がいった。「水谷さんは福岡の会社がきまったんでしよう」と県立女学校生の古田レイ子がいった。「君は」と彼がきいた。「うちは専攻科にく」と彼女がこたえた。「あと一ヵ月だからなあ」と彼がいった。「一ヵ月ね」と彼女がいった。「寒くないか」と自分のマフラーをさしだしながら彼がいった。「よかよ、寒くなかよ」と彼女がいった。「何にも勉強しなかったなあ、大学にいかうと思っただけだね、兄弟がたくさんいるからね」と彼がいった。「お父さんお加減は」と彼女がきいた。「うん唐津の病院にずっと入っているんだけどね」と彼がいった。

「ワイゼンは荒れるね」「ワイゼンは本当は悲しいんだよ、田中が自殺してから、手当り次第だからな」「ずいぶん顔が変わったからね、ワイゼンと同級生のメツチェンがいうとった。ワイゼンの下宿にいくといつも電気が消えていて、いないのかと思つてのぞくと泣いとるんだそうだ」「田中はちょっと変つていたからな」「奴はよく読んでいたよ」マンントの学生たちの声がそれまでの調子とまるで変つたように

感傷的になり、水谷彰が「じゃでようか、汽車はまだ時間があるから僕の下宿にでもいくか」といった。「でもお友達が一緒におられるんでしよう」と彼女がいった。「いるけど、まだ三時間もあるからね、……そう気のおける奴じゃないよ」といいながら彼が立上った。

「二人っきりの方がいいから」という言葉が口にでぬまま、結局ずるずると彼の唐人町の下宿に彼女はつれられていったが、水谷彰が「今夜の夜行で帰るんだがそれまで」と、一緒の部屋にいる同僚社員に少してれたように説明すると、気をきかせたのか「風呂にいつてくるから」とややぶつきら棒ではあったが、嫌味のないそぶりで、「いいんだよ、いいんだよ」と彼がとめるのをきかずにその同僚はでていった。

ふたたび二人の間に空気を一区切ずつ切っていくような時間が流れはじめ、掠れた声で彼が「お茶でもいれようか」といった。「何にもいらないから」と彼女がこたえた。と、その声をまるで無理にきっかけにするかのように、唐突に彼が彼女の肩を両腕で後から抱きしめた。彼の唇が彼女からはなれるまで、何か不自然な悲しい思いにひたりながら古田レイ子はじっとしていた。「結婚できるといいがなあ、君のお父さんたちだって、別に反対はされないだろう」と彼女の顔をはなすとすぐ彼がいった。「ええそれは、博多にくることだってそう薄々感じているんだから」と彼女がこたえた。「そんなら」といいながらふたたび彼がいつもとちがう異様な力のこもった腕で彼女の上半身を羽交じめにした。「だめよ」と彼女がいった。「どうして」と彼がいった。「だめよ」といいながら彼女が自分の胸の中に入っていくとすると彼の腕をとめた。「結婚しよう」と彼がいった。「結婚はするけど、いまはだめよ」と彼女がいい「自然じゃないから今はだめよ」と自分と全く別のような声でつぶつけた。「おれは卑怯だね」といい